

今は半ば忘れられてるが、琉球併合は明治初期の最も興味ある重大事件であつた、此の琉球併合に関する記録は本とは外務省に保管されてゐたが、沖縄県が置かれてから内務省に引継がれた。甲乙二部に分れて甲は併合に関する清国との交渉始末、乙は内政上の処理を専らとする記録である。此中、乙冊だけは先年副本を沖縄県庁に交附し今も安全に保管されてるが、最興味深い対外機密に関する甲冊は今度の火災で島倉に歸して了つた。沖縄県が置かれたのは明治十二年であるが、併合交渉の初まつたのは六七年頃からである。琉球は三百年來薩摩の藩屬であつたから、其併合は事実上には地図の塗更へ以外の面倒を伴はなかつたが、琉球を中心とする日支の政治上、文化上、民族上の複雑なる関係は極めて興味深い問題であつた。随つて日琉併合は日本の膨脹史の第一頁を作るのみならず數百年來の歴史的懸案の解決であつたので、此の併合顛末の重要記録が喪はれたのは明治の歴史上極めて遺憾である。

乙冊副本即ち『琉球処分』は本館に保管されたお蔭で、漸く焼失を免かれた。其外にも中央で焼失して取返しがつかないと思はれてゐるもので、この郷土史料室で見出されるのが可なりある。兎に角、琉球史料の永久的保存方法を講ずるのは、首里城の永久的保管方法を講ずると同じく、一大事業でなければならぬ。他日県の財政に余裕が出来たら、震災に耐へ得るやうな郷土史料室を建て、貫はなければならぬ。

- 一 それらの史料を蒐集するについて、真境名安興氏は、開館當時から今日に至るまで、多大な貢献をされたばかりでなく、今その目録の公刊に当り、序文を物して史料蒐集の経緯を審にされた。特に記してその勞を謝する。氏の名は恐らく郷土研究の続く限り記憶されるであらう。〔大正十三年春〕

琉球民族の精神分析

—— 県民性の新解釈 ——

吾人は歴史によつて庄しつぷされる。——グルモン——

私はかつて『図書館報』に「琉球民族の精神分析」といふ論文を發表したことがあるが、發行部数が少なかつた為、一般にはいきわたらなかつたと思ふから今之を訂正増補し、『沖縄教育』の読者に訴へることにしよう。この小論文は県民性の新解釈ともいふ可きものであるが、県民性の解釈にはいろいろあるだらうからこれはただその一つであつて、先人未発のものであるといふだけをつて置く。これがいふ解釈であるや否やは讀者の判断に任すことにして、兎に角私は之を發表することにしよう。

〔南島史考〕序に代へて（本全集第三卷所収）三頁七行—六頁八行、八頁一三行—一〇頁二行とほぼ同文のため削除）

彼等は兎に角瘦地に落ちた種子のやうなものだ。私は本県の教育家諸君がこゝに着眼して下さることを切望して已まない。有島武郎氏の「小兒の寝顔」といふ小品文に「……夜おそくなど、独り眼をきまして、熟睡した小兒を見守つてゐると、見守るに従つて私の心は淋しくされる。彼れの頬は健康と血氣とを以つて赤い。彼れの皮膚は苦慮によ

つて刻まれたる一条の皺をも持つてゐない。然しその何事をも知らぬげな顔全体の後ろに、恐ろしい真暗らな運命が、それが冷やかに底気味悪く覗いてゐるではないか」といふことがあるが、無邪気で可憐な我が子の寝顔を眺める度毎に、私も亦武郎氏と同じ様な不安の念に襲はれる。そして生長していく孤島に可愛い子を生ま落して自分と同じ様な苦勞を繰返させるのは一つの罪惡ではないかと思ふことさへある。そこで私はこの頃、いつそのこと日本の中心に引越し、東京府に籍を移して、子供を江戸子にしてやるのが、子供に対する大なる愛ではないかと感ずるやうになつた。私は覺えず愚痴をこぼしたが、之を弱者の心理だといつて輕蔑する人があつたら、勝手に輕蔑するがよい。私はたうとう県民性の悪い方面を暴露してつた。ふだんから本県人の行動を嫌らなく思つてゐる人たちは之を見てますます本県人を輕蔑するやうになりやしないか。否々決してさうは、しまい。誰か彼等をかういふヤクザモノにしたのを了解した刹那に、その輕蔑の念は同情の念に變つたに相違ない。就中彼等をかういふ者にした責任者の子孫たちは、彼等の為に何かしてやらなければならぬといふ氣になつたに相違ない。

以上私は琉球民族の精神分析をして、ヒステリックの症候があるとした。最初に述べた通り、フロイド一派は、ヒステリ患者に催眠術や談話法によつて、その苦悶の原因を出来るだけ自由開放的に語り尽させ、その抑圧を除去することによつて、病を治療するとのことだから、県民性を矯正する為に、郷土史の研究を盛んにして其の真相を暴露することは、沖縄県民を救済する一方法でなければならぬ。

〔前掲書一〇頁一七行十一頁六行とほぼ同文のため削除〕

制度の人心に及ぼす影響の如何に大なるものであるかはこれで能くわかる。

大正六年の十一月二十三日の『沖縄朝日新聞』に私は「将来の大問題」といふ論文を発表したことがあるが、今ここに其中から十数行引用するの必要を感じてゐる。

「茲に惡癖を有する一青年があつて、教育の御蔭で其の欠点を自覺し、非常に努力して惡癖から解放されたが、何時の間にか後戻りして、再び惡癖の奴隷になつたと假定する。斯ういふ状態を指して、那覇ではチムンテーンアランといつてゐるが、これは心には是非さうせなければならぬときめても、何だか能くわからない他の力が活いて、自分の思ふ通りにさせないことを意味する。もつと具體的にいふと、折角眞人間にならうと決心したが、惡癖を有してゐた数代前の祖先の靈が活いて之を妨害するといふのである。これで見ると沖縄人はこの心理現象を宗教的に解釈してゐることがわかる。併し時としてはかういふことを『血の業』などといつてゐるのを見ると、遺傳學的に解釈してゐるやうにも見える。使徒パウロはかういふ場合をわが肢体に他の法ありて、我心の法と戦ひ、我を擲にして、我が肢体の中に居る罪の法に従はしむるを悟れり、ロマ書」と説明した。試みに之を現代的に説明してみると、意識的にはさう定めてゐても、之に反対する力が其の原形質的成分中に潜んでゐて、無意識的に之を妨害することである。(中

略)これは何だか宿命論的な思想であるが、私は沖縄に於ける過去二三十年間の政治、産業、教育、宗教等の状態の思はしくないのを見て、その原因をその指導者や制度の罪にのみ歸するは少しく酷であつて、その民衆の原形質的成分即ち生來の素質の如何にもよるのではないかとの疑問を起すやうになつた。耶蘇は成程眞理は汝等に自由を得しむべしといつたが、眞理はそれを受け容れるに適當な原形質的成分を有する人にも自由を得させるのではあるまいか。召さるゝ者は多けれど選ばるゝ者は少ない(マタイ伝)との耶蘇の言葉の中には確かに予定説がほのみえてゐるやうに思はれるがどんなものであらう。」

その頃私は復生學の研究に没頭してゐたので、遺傳に重きを置き過ぎた結果、肉体上の解放——馬手間の如き惡内

法を全廃して、雑婚を奨励し、吾人の重荷なる精神上肉体上の悪素質の復現を減じ、その上盛に善種を輸入して、本県人の素質を先進させなければならないといふこと——を唱導して、一生懸命に民族衛生の運動をやつたが、私には相当の効果があつたやうに思つてゐる。けれどもその後唯物史觀を研究して人の意識が人の生活を決定するのではなく其の反対に人の社会的生活が人の意識を決定する、といふことを理解するに及んで、私は環境といふことをおろそかにしてはならないといふことを考へさせられるやうになつた。従つて沖縄がかうなつた原因をその制度に求めなければならないやうになつて来た。さうかといつて私は遺伝をないがしろにするのではないが、環境も遺伝に劣らない力を有つてゐるといふことを認めるやうになつたのだ。考へて見るが、い。現今の自然科学発達で、沖縄県人の原形質的成分即ち生来の素質がどんなものであつて、どれほど他府県人のそれに劣つてゐる、といふことを誰が言ひ得よう。沖縄人の生来の素質と思はれてゐるものは、大部分制度が造つてくれたもので、後天的のものに過ぎないだらう。さうすると、あのチムンテニアランといふ言葉の内容も従つて豊富になつて来なければなるまい。本県人は自分で意識しない超個人的意識になやまされて、ヒステリックになつた時にも、チムンテニアランといふ嘆息を瀟す。この言葉は三百年來の悲惨な歴史を有する琉球民族が苦しまぎれに発した嘆息に過ぎない。私は之を性格破産者の苦しい叫びと呼ぶ。私はまた「将来の大問題」の中に、「この根本的解放（即ち人種改良）が行はれた後に来る自覚こそは眞の自覚であつて、この自覚の下に政治産業教育は其の新生面を開くのである」といつたが、今や私はこの言を少しく訂正しなければならないやうになつた。そして琉球民族がかつて受けた心的外傷は彼等の肉体が改造されても容易く消滅するものでないといふことを知つた。実際彼等は新制度の中に這入つても、旧制度の中で育かれた性情を棄てることが出来なかつた。そこで宗教家が彼等の人生觀をたやすく転換させて、本県を救済しようとするのはお目出度い考へといはなければならぬ。彼等は速に個人的救済から社会的救済に眼を転すべきである。

今や本県の旧家は大部分破産し、本県の銀行会社も亦破産に瀕してゐる。万一沖縄人が再び奴隷の境遇に沈淪することがあるとしたら、現今の社会組織の中では、彼等はたとひ神の国と其の義とを求め得たとしても、その他の物は自らは与へられまいし否彼等はその失つた物を永久に取りかへすことは出来まい。私たちは「衣食足りて礼節を知る」といふ管仲の言を能く味はつて見なければならぬ。経済生活がいきつまつた時、彼等がいよいよますますヒステリックになるのは火を暗るよりも明である。かうして極度のヒステリックになつた時、彼等は彼等を押しつぶす重荷をおしのけることが出来るだらうか。

かういふ重荷を背負はされながら、尚且彼等は其の歩みの遅いのを非難されてゐる。彼等は内地の文化に追付かうとするには、教育其他の設備を比較的完全にしなければなるまい。ところが彼等の租税負担力は殆ど其の極限に達してゐるではないか、兎に角彼等の経済生活は行詰まつてゐるといつてい。露骨にいふと現今の沖縄は或意味に於て琉球入にも劣らない危機に遭遇してゐるに拘はらず、県民は惰眠を貪り、その政治家は党争に日もこれ足りないといふ有様である。彼等の中誰か競争に飽いて、この危機を切抜ける運動を開始する者はゐないだらうか。もしゐたら、

おもむろに県民性の由つて来たる所を究めて、直ちにその社会的救済の策を講ずべきである。今となつては、民族衛生の運動も手緩い、啓蒙運動もまぬるい、経済的救済のみが私たちにこのされた唯一の手段である。仲吉朝助氏が三月廿一日「沖縄日の出新聞」の改題号で提唱された「眞經濟界の根本的改革策」は近頃傾聴すべき議論の一である。氏の意見をかいつまんでみるとかうだ。本県目下の窮状は或國家が内憂外患で滅亡に瀕してゐるのに似通つてゐる。その航路金融の二機関が他県人の願使の下にある間は県人の経済生活が豊富になる筈がない。現在は航路機関始と一会社の独占事業になつてゐる爲に、その蒙る弊害は莫大で、諸物価の騰貴も一にこれに原因するから、之を県営にするが、い。それから金融機関の方面でいつても、現在のやうな破綻だらけな機関と小資本とでどうして事業をやつて

いけるか。現在の金融機関を合併するか、それが不可能なら、更に立直しをするかして、同時に国庫金を移管しなければならぬ。あれだけの税金を国庫に納めてゐるのにそれに対する報酬が余りに少ないではないか。現今の窮状を脱するには是非共この両方面を改善しなければならぬ。県の経済界の行詰りを云為する人は単に移出入表のみで論じて、航路金融両機関の損害から来る方面を看過してゐる傾きがある云々。もしかういふことが実現されるとしたら、きはめて好都合だが、そこには利害関係や人種的感情などがこんがらがつてゐるので、かういふ意見は排他的といふ悪名の下に、すぐさまかたづけられて了ふから仕方がない。どうせ私たちは底まで沈まなくてはなるまい。前にもいつた通り、もうかうなつた暁には、本県人は全く自治の能力が活かないやうになるから、結局所謂「御手入処分」^{御手入処分}みたいなものを受けるにきまつてゐる。兎に角今のうちにどうにかして救済して貰はなければならぬやうな気がする。本県は毎年五百万円の国税を納めてゐるが、本県が受ける国庫の補助金は僅百七十万円に過ぎない。つまり三百万円以上の大金が国庫に捧上げられる勘定になる。捧上げられるといふと語弊があるが、国防や教育や交通など国家に必要な設備に使はれるのだ。けれども本県人はその恩恵に与ることが至つて少ない。もし琉球と鹿児島が地続きだったら、本県人も他府県人同様に、国家の酒盛りに列なつて、思ふ存分に御馳走を戴けたに相違ないが、七島灘があるためにいつも孤島苦^{孤島苦}ばかり嘗めさせられてゐる。気の毒だと思つて高等学校の一ツ位は立てゝ貰へないものだらうか。困つたことには中央政府には沖縄の事情が能く知られてゐない。「沖縄県人の性質はひねくれてゐる、彼等のやる仕事はいつもこんなものだ」位な皮相的統計的事実しか知られてゐない。その民族性の由つて来たる所とその事業の失敗する所以とを知つて貰はなければ駄目だ。沖縄を代表する位な人は、この根本問題を擧げて、中央の政治家に本県を徹底的に了解せしめるやうに努力しなければなるまい。一時に七十万円位を貰つて来てそのお手柄を吹聴するやうでは駄目だ。さういふものを引續いて貰ふやうに尽力して貰ひたい。さういふやうにしてその経済生活がゆつくりなつ

た暁に、本県復活の曙光は現はれて来るのだ。経済生活が豊になるにつれて、今まで活動してゐた悪民族性は漸次影を隠して、超個人的意識のいふ方面がそろ／＼現はれて来るのだ。さうでないかぎり、如何に立派な教育方針も、如何に適切な産業政策も、徒らに机上の空論になつて了ふだらう。

私たちは再び奴隷にはなりたくない。又日本政府としてもこの聖代に六十万の奴隷を出すのは恥辱であらう。党争をやめよ。分取主義を棄てよ。お互に協力一致して、この根本的問題の解決に熱中しようではないか。私は少しく言ひ過ぎたかも知れない。けれども私は全部を言つて了つたのではない。このことに就いては、他日筆を改めて、論ずる機会があらう。

私の小論文は結論に近づいた。もう一言述べて、私はこの稿を終らう。

〔前掲書一頁二七行―二頁八行とほぼ同文のため削除〕

そこで私は一つの疑問を起さざるを得なくなつた。本県ではどの県にも劣らず国民教育が鼓吹されてゐる。それは実にいふことだ。けれども暗示をかけるのを教育家の能事のやうに考へてゐるのは間違つてゐると思ふ。それから近來こゝでは仏教や基督教なども盛んに活動してゐる。彼等の教祖達はどれも人類に生命を与へたローフア一であつたが、その真精神はその宣伝が企てられた刹那から曲解された。そして彼等の末流は暗示をかけて人を奴隷化する魔術師となつた。吾々沖縄県人はこれ以上暗示をかけられてもよいだらうか。

〔前掲書一頁九行―一五行とほぼ同文のため削除〕

(大正十三年三月廿日稿)

397 543 509 415 371 283	第九卷	中 下 5 行 10 行 12 行 9 行 14 行 見出し
432 353 240 177 152 151 146 88	第十卷	7 行 1 行 18 行 2 行 10 行 7 行 18 行 17 行 見出し 7 行 3 行 1 行

伊波普猷 人と思想 (全一卷) 外間守善編

第一部 その人 柳田國男／折口信夫／比嘉泰潮／車恩納寛博／

warabin. ^x 馬丁トノ間答	warabin. ^o 馬丁トノ間答
Forcade x	Forcade
上 ^x 已 ^x 伊波普猷	ムスン。 「琉求人南洋
住民の遺骸 ^x	民の遺骸。
ロイド・ヂョーヂ	ロイド・ヂョー
一週した ^x	一週した ^チ
kaōha	kaōha
□北岸 ^x	□海岸
□歌 ^x 雙	□歌 ^o 雙
ゴザリマス	ゴザリマス
絃歌之由來 ^x の中	絃歌之由來の中
沖繩人同志 ^x で	沖繩人同志
妙なきつけで	妙なきつけで

服部四郎／仲宗根政善／金城芳子他
第二部 <その思想> 大城立裕／大田昌秀／比屋根照夫／外間守善
第三部 <資料> 比屋根照夫・外間守善編

昭和五十一年十二月刊予定

長らくお待ちいたしました。『伊波普猷全集』は、この第十巻をもって完結いたしました。本年(昭和五十一年)は、伊波普猷の生誕百年です。この年にあたって全集を終えることができましたのを喜ぶと同時に、完結に先立って、昨年十一月二十二日に逝去されました伊波冬子夫人を悼み、心から冥福をお祈り申し上げます。

第一巻を世に出してから二年半、この間、読者の皆さま、編集委員・校訂者の諸先生をはじめ、至らぬ編集部を教え導いてくださった方々、資料集めや図書の借出し・複写、さらに索引のカードとりなど、縁の下の力持ちとなって助けてくださった若い方々の、柔らぬご支持があったからこそ、この全集は無事に終わることができたのでございます。とくに、地元沖縄の県や市の文化関係当局や、個人の方々の熱意にあふれたご厚意は、身にしみて嬉しくございました。皆々さまの心からのご援助は、ひとえに伊波普猷の偉大な人格によるところと確信しておりますが、編集部からも、厚く御礼申し上げます。いちいちお名前をおいつくせませんが、ここに心からごあいさつ申しあげる次第でございます。

全集はこれで完結いたしますが、これからもまた新しい資料が発見され、伊波普猷の業績はさらに明らかになることごさししょう。もし新事実がおわかりのせつは、今後ともごめんどうながら編集部あてご一報賜りたく、さいごにお願い申し上げます。

なお、本年秋には『伊波普猷 人と思想』一巻の刊行を予定しております。本全集とあわせ、皆さまのご研究のお役に立つことができれば、光栄に存じます。(昭和五十一年八月編集部)

伊波普猷全集 第十一巻

昭和51年10月8日初版第一刷発行

著者 伊波普猷
発行者 下中邦彦
発行所 株式会社平凡社

東京都千代田区四番町四番
郵便番号 100-0132
電話 東京八二九六三九

印刷所 東洋印刷株式会社
製本所 株式会社石津製本所

伊波冬子 1976 Printed in Japan

定価は箱に表示しております
不良本は直接株式会社でお
取替え致します(送料小社負担)